

PROGRAM NOTE

1987

近藤譲：始め、中、終り

フルートと弦楽四重奏のための

Beginning, Middle and End

for Flute, String Quartet

この題名は、形式についての古典的な規範、即ち、アリストテレスが『詩学』の中で述べていることに由来している。彼によれば、一つの作品全体は、始めと、中間と、終わりの諸部分が、必然性のある繋がりをもっていなければならない。私の《始め、中、終わり》も、その題名の通り、3つの部分でできているが、しかしそれは、私がアリストテレス的な規範を受け容れてこの曲を書いた、ということではない。この曲の「始め」と「中」と「終わり」の諸部分は、その名に相応しく適切なものではあるが（少なくとも私自身はそう確信しているが）、諸部分の配列順序に必然性があるわけではない。実のところ、この音楽の全体的な成り行きには、例えば物語のような目的論的な方向性がない。したがって、これら3つの部分の順序は、入れ替えることもできる。仮に、ここでの「始め」と「中」の部分が入れ替わっても、曲は成立し得るだろう。3つの部分は、曲の初めから終わりまでを通して貫く方向性のある論理的な成り行きを作るために組み合わせられているのではなく、「静止態」としての全体を作るために単に並置されているだけなのである。では、これらそれぞれの「始め」、「中」、「終わり」の部分が適切であるという根拠はどこにあるのか？それについては、次のように言うことができる。つまり、この種の音楽に於いては、曲の始めに置かれたものは何でも、それによって曲が始まるという事実によって、適切な「始まり」となる。当然、「中」についても「終わり」についても、同じことが言える。静止的な音楽にあっては、諸部分の形式上の役割は、その内容によってではなく、配置の場所によって決まるのである。

近藤譲

初演：1987年7月（スイス ジュネーヴ）

初演者：ピエール＝イヴ・アルトー（フルート）、アルディッティ弦楽四重奏団

出版：University of York Music Press (UK)

録音：ALCD-57

演奏時間：8分